慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	魯迅の書信から陳其昌その人を語る
Sub Title	In memory of my old comrade Chen Qichang
Author	王, 凡西(Wang, Fanxi) 長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.1 (2008. 3) ,p.105- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20080331-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

魯迅の書信から陳其昌その人を語る

王凡西著
長堀祐造訳

訳者解題

本稿は中国トロツキー派の指導者の一人、王凡西（一九〇七～二〇〇二）[1]が同じくトロツキー派の同志、友人である陳其昌（一九〇〇～一九四二）について書いた文章の翻訳である。本稿前半部の（一）～（四）は香港の雑誌「中報」（一九八六年、巻号未詳）に発表されたものであるが、後半部の（五）は未発表稿で、ともに訳者が生前の著者から直接提供を受けたものである。「中報」誌が全文のゲラ刷りまで出したものの、（五）の部分の掲載は見合わせたと考えられる。原文テクストは（一）～（四）は「中報」誌コピーに、（五）はゲラ刷りのコピーにそれぞれ著者自身が朱を入れたものである。

さて、王凡西の本文とも重なるが、陳其昌について簡単に紹介しておきたい[2]。

陳其昌、別名陳仲山、陳清晨など。河南洛陽の人。訳者が二〇〇〇年度、訪問研究者として北京大学中文系滞在

当時、同大学档案館で調査した諸資料によれば[3]、陳其昌は河南省立第八中学卒業後、民国十一（一九二二）年九月に北京大学預科乙部英文班（英語クラス）に入学、民国十三～十七（一九二四～一九二八）年、哲学系に在籍したことが確定できる。この間、一九二五年に中共入党、中共北京大学支部幹事、中共北京東城区区委などを歴任、基層幹部の一人となり、北京大学で三学年下の王凡西とも知り合う。後、陳独秀に従ってトロツキー派に転じ、一九二九年中共除名。トロツキー派指導者の一人となる。一九四二年夏、上海で抗日運動に従事中、日本軍憲兵に逮捕され、秘密裏に処刑された。しかし、陳其昌つまり陳仲山が中国トロツキー派史の範囲を超えて、その名を歴史に留めるのは、魯迅作とされた「トロツキー派に答える手紙」のきっかけとなる手紙を魯迅に書き、『魯迅全集』に長らくトロツキー派「漢奸」として（明示的ではないものの）記されてきたためである。ここでは本解題注（2）で挙げた拙稿からかいつまんで、簡単にその事情を再確認しておきたい。

一九三六年六月三日、中国トロツキー派組織中国共産主義同盟臨時中央の一員、陳仲山（陳其昌）は魯迅に手紙を書き、同時に同派の機関紙とトロツキー著の中文訳パンフレットを送った。陳仲山の手紙は、コミンテルン・中共の「新政策」、つまりは統一戦線政策は、階級的立場を放棄し、再び国民党に革命を売り渡すものだと批判する内容であった。北京大学時代に魯迅の授業の受講生だった陳仲山は、魯迅の気骨に敬服しており、折から展開されていた国防文学論争で魯迅がコミンテルン・中共の新路線に批判的で、周揚ら中共主流からトロツキストと罵倒されているような状況があることを聞きつけ、手紙を認めたのであった。これに対する魯迅の返信とされてきたのが「トロツキー派に答える手紙」（以下「手紙」と略称）である。「手紙」は陳仲山の統一戦線批判には直接は答えず、巧妙な書きぶりで、中国トロツキー派が日本から資金援助を受けていると示唆する一方、毛沢東率いる中共支持を明確に打ち出した。これによって中国トロツキー派は大きな政治的打撃を受ける。陳仲山はこれに反駁する長文の

第二信を七月四日付で魯迅に送るが、[4] 魯迅日記七月七日の条に「陳仲山より来信、トロツキー派である」と空しく記されたのみで、十月十九日、魯迅は臨終を迎える。以後、近年に至るまで中国トロツキー派は日本軍から金をもらった「漢奸」とされ、魯迅は毛沢東によって革命の聖人に列せられてきた。しかし、魯迅口述、馮雪峰筆録とされてきたこの「手紙」は実は魯迅の著作とするには無理があることが、当事者たる馮雪峰や胡風の証言[5]で明らかになっている。馮雪峰の作とするのが妥当なのである（残念ながら、二〇〇五年の新版『魯迅全集』は相変わらずこの「手紙」を魯迅の著作として収録しているが）。しかし、「手紙」で暗に「日本軍から金をもらっている」と中傷された陳仲山は抗日戦中、上海で当の日本軍憲兵に処刑されていたのであった。

中国トロツキー派はこの一九三六年の「トロツキー派に答える手紙」以来長らく、中共（スターリン直系の王明・康生ら及び土着派毛沢東派を問わず）によって日本軍から金をもらった「漢奸」とされてきたのだが、これがデマだということは中共党内の多くの党員が知っていることであった。[6] そして、一九九一年『毛沢東選集』第二版（人民出版社）が出るに及んで、ようやくこれがデマであったことが中共自身によって確定されたのである。同選集第二巻「持久戦論」の注9は毛沢東が本文中「鎮圧漢奸托派［トロツキー派漢奸を鎮圧する］」という表現を用いているのに対し、これは「当時コミンテルン内部で流布していた中国トロツキー派が日本帝国主義のスパイ組織と関係があるという誤った論断に基づくものである」とした。ここにはまだ、嘘がある。実は『毛沢東選集』第二版の編者たちは、このデマの源を王明・康生ら当時のスターリン直系派としたいようだが、彼らがパリで出ていた「救国時報」で反トロツキーのデマキャンペーンを展開するのはこの「トロツキー派に答える手紙」以後のことなのである。[7] 最初にトロツキー派「漢奸」説を示唆したのは、馮雪峰、毛沢東ラインという構図が客観的には見て取れるのである。ともあれ、トロツキー派は「漢奸」ではなくなったわけである。しかし、一九五二年中国全土で展

開されたトロツキスト粛清で、反革命罪によって逮捕された数百人のトロツキストがこれによって「名誉回復」したわけではない。

ただ、歓迎すべき変化がまったくないというわけでもない。一九八一年版の『魯迅全集』では「手紙」に付された注1で、「来信者陳××の原署名は陳仲山、本名は陳其昌、複数のトロツキー派分子の回想録によれば、当時陳はトロツキー派組織の臨時中央委員会の委員」とあるのみだが、二〇〇五年の新版『魯迅全集』では陳仲山に関する独立した注が付され、「陳××、原署名は陳仲山、本名は陳其昌（一九〇〇－一九四二）、河南洛陽の人。一九二五年中国共産党に加入、後、陳独秀に従ってトロツキー派の立場に転じ、党を除名、中国トロツキー派組織の指導者の一人であった。抗日戦期、上海で抗日活動に従事していたため、日本軍に捕らえられ、殺害される」となった。その最期が明記されたのである。

王凡西の本文は、同志にして旧友たる陳其昌に対する敬愛の念が行間から滲み出ているだけでなく、陳其昌その人の為人がよく描かれている。

なお、訳文中、（ ）は原注を、［ ］は訳注を示す。長めの原注、訳注は後に置くこととする。

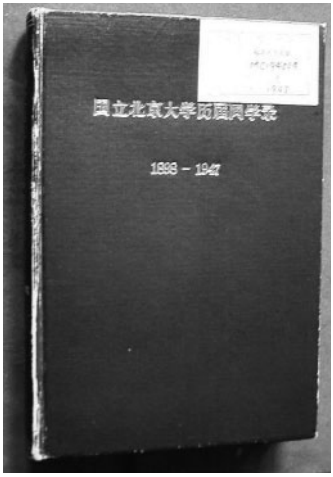
［訳者解題］注

（1）王凡西については慶應義塾大学日吉紀要「言語・文化・コミュニケーション」No.37二〇〇六年所載の同著者による文章の拙訳「胡風遺著読後感」の「訳者解題」及び同じく同紀要No.39所載の「宋雲彬と許志行を思う」の「訳者解題」を参照頂きたい。

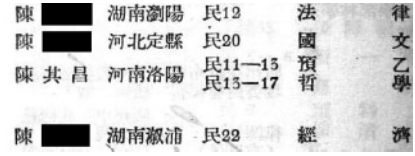
（2）拙稿「『トロツキー派に答える手紙』をめぐる諸問題」正・続、『日本中国学会創立５０年記念論文集』（一九九八年、

汲古書院）、『蘆田孝昭教授退休記念論文集　二三十年代中国と東西文芸』（同年、東方書店）に、陳其昌についての基礎的な伝記的事実と本解題後述の魯迅作とされた「トロツキー派に答える手紙」をめぐる問題についての基本的な事実関係が記されているので、参照頂ければ幸いである。

（3）調査した資料は以下の通り。『国立北京大学歴届同学録　1898―1947』（五十周年籌備委員会編、国立北京大学出版部、民国三十七年十二月）、『国立北京大学同学録』（中華民国十三年編、同十四年編の二冊）、『北京大学学生履歴一覧』のうちの一九二二年～一九二七年分。このほか、北京大学図書館で調査したものに『北京大学日刊』があるが、これはリプリントが出ているので、日本でも容易に調査が可能だ。さらに陳其昌の長男、陳道同著「陳其昌之死」（「魯迅研究月刊」二〇〇一年四月号、拙訳に「中国研究月報」二〇〇二年四月号（No.650）第五六巻第四号）も参照のこと。

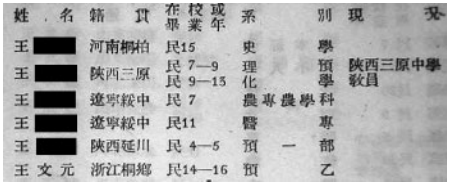


『国立北京大学歴届同学録　1898-1947』



陳 [redacted]	湖南瀏陽	民12	法		律
陳 [redacted]	河北定縣	民20	國		文
陳其昌	河南洛陽	民11―13 民13―17	預 哲		乙 學
陳 [redacted]	湖南瀟浦	民22	經		濟

上記同学録所載の陳其昌の項。



姓名	籍貫	在校或畢業年	系別	現況
王 [redacted]	河南柳柏	民15	史學	
王 [redacted]	陝西三原	民7―9 民9―15	理預 化學	陝西三原中學教員
王 [redacted]	遼寧綏中	民7	農專農學科	
王 [redacted]	遼寧綏中	民11	醫專	
王 [redacted]	陝西延川	民4―5	預一部	
王文元	浙江桐鄉	民14―16	預乙	

上記同学録所載の王文元（王凡西）の項。

「北京大学一九二四年度学生履歴一覧」中の陳其昌の項。

『国立北京大学同学録（中華民国十四年編）』九七頁の王凡西の項。「姓名：王文元、別号：聞源、籍貫：浙江桐郷、年歳：二〇、科級：預科乙部一年級、臨時通訊処：沙灘萬興公寓、永久通訊処：浙江峡石南寺街柏家弄」と読める。

なお、管見の限りではあるが、『北京大学日刊』の一九二二年～一九二七年分で確認できる、王凡西、陳其昌関連の記事に以下のようなものがある。

日付	登場人物名	記事内容
1. 民国十一（一九二二）年八月五日	陳其昌	預科英文班合格者欄
2. 民国十二（一九二三）年九月二十日	陳其昌	乙部預科一年生二年進級許可者欄
3. 民国十三（一九二四）年七月十二日	陳其昌	預科乙部二年生升学（本科進学）許可者欄

4.	民国十四（一九二五）年	一月十四日	北京大学学生会正式成立通告
5.		二月二六日	北大国語演説会啓事
6.		八月一日	預科一次試験合格者欄
			張光人［胡風］ 王文元［王凡西］ 王思禕［王実味］
7.		八月八日	預科合格者欄
			張光人 王文元 王思禕
8.		十一月十三日	北大国語演説会通告第六号
		同日	発起預科乙部一年級級友会縁起
9.	民国十五（一九二六）年	五月七日	北大平民夜校図書館通告第二号
10.		九月二五日	預科乙部二年昇級者
			張光人 王文元 王思禕
11.		十二月十一日	北大河南同郷会鑑
12.		十二月十四日	北大第一平民学校啓事一
13.		十二月二三日	北大河南同郷会啓事
14.		十二月三〇日	預科乙部一年級級友会縁起
		同日	北大国語演説会通告第八号
15.	民国十六（一九二七）年	一月八日	学生会各班当選代表　乙部預科二年級Ⅵ班
			李芬 王文元　王思禕

16. 一月十日　王文元　北大国語演説会通告　怎様纔配称中国的新青年？

17. 一月十一日　王文元　北大国語演説会通告　怎様纔配称中国的新青年？

18. 一月十二日　王文元　北大国語演説会通告　怎様纔配称中国的新青年？

19. 一月十三日　陳其昌／李芬　北大学生会第四届代表大会記事　宣伝股　陳其昌　二十票（副主任）　交際股　李芬　二十票（正主任）

20. 四月五日　李芬　北大国語演説会通告　通告第十二号

21. 六月十八日、二五日　張光人　休学者欄

（4）拙稿「その後の陳仲山――中国トロツキー派と魯迅の往復書簡――」付日本語訳「トロツキー派に答える手紙」及び「トロツキー派分子から魯迅先生に答える手紙」（一九九六年十月「トロツキー研究」第二〇・二一合併号）に前後二通の陳仲山の手紙の拙訳がある。なお、この後者書信拙訳の原文テクストは「魯迅研究資料」第四巻（天津人民出版社、一九七九年）所収の「陳仲山致魯迅（一九三六年七月四日）」であるが、二〇〇〇年に訳者が北京魯迅博物館で撮影したこの書信の現物との間には若干の異同がある。両テクスト間の校勘が済んでいるので、いずれ紹介したい。

（5）馮雪峰著「有関一九三六年周揚等人的行動以及魯迅提出『民族革命戦争的大衆文学』口号的経過」（「新文学史料」第二輯、一九七九年二月、人民文学出版社。文革期の「交代（供述書）」に馮雪峰自身が加筆修正したもの）、及び胡

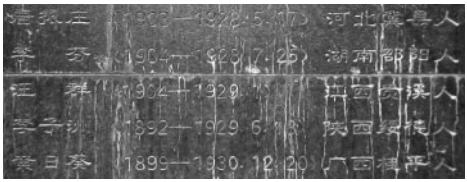
風著「魯迅先生」（「新文学史料」一九九三年第一期掲載、執筆は一九八四年二月付）参照。なお、房向東著『魯迅与他的論敵（魯迅と彼の論敵たち）』（上海書店、二〇〇七年）所載「〝托派〟即〝漢奸〟？（〝トロツキー派〟は即ち〝漢奸〟か）」に、馮雪峰は「文芸報」一九五一年第四巻第五期掲載の「党給魯迅以力量（党が魯迅に力を与えた）」でもすでにほぼ同じ内容を語っているとの指摘がある。この文章は確かに『雪峰文集』第四巻（人民文学出版社、一九八五年）や『回憶魯迅資料輯録』（上海教育出版社、一九八〇年）などに収録されている。さらに一言。房のこの文章が陳仲山（其昌）の日本憲兵による殺害時期を一九三八年九月とするのは誤り。正しくは一九四二年。

（6）拙訳王凡西著「宋雲彬と許志行を思う」（「日吉紀要言語・文化・コミュニケーション」No.39、二〇〇七年十二月）参照。

（7）香港馬克思［マルクス］主義研究促進会編『立此存照』参照。本書の副題は「中国共産党在法国巴黎発行的機関報『救国時報』上刊登的有関中共整粛中国托洛茨基陳独秀派資料匯編」。

（8）李芬は王実味が北京大学時代に思いを寄せた女性同志。党内で恋愛事件を起こしたことで、王実味は当時「恋敵」が牛耳る北京大学の中共組織において厳しく批判された。李芬は一九二八年、親族の密告によって郷里湖南で国民党に逮捕処刑。その後、王実味は李芬の親友、劉瑩と結婚。延安に赴いた王実味は一九四二年、整風対象となり、一九四七年、トロツキストとして処刑された。劉瑩は一九九一年の王実味復権実現に尽力した。詳しくは王実味著「野百合花」（邦訳「野百合の花」には丸山昇訳『原典中国近代思想史』第五冊、岩波書店、一九七六年、所収、及び、竹内良雄訳『現代中国文学』第十二巻、河出書房、一九七一年、所収がある）及び、本文訳注（8）参照。

北京大学構内にある「北京大学革命烈士紀念碑」。子供が登って遊んでいた。



紀念碑裏面。北京大学ゆかりの烈士の名が刻まれており、李芬の名も見え、「李芬（1904－1928. 7. 25）　湖南邵陽人」とある（2000年4月8日撮影）。

（一）

膨大な数の魯迅書信中、「トロツキー派に答える手紙」はとりわけ有名である。この書信は発表されるや（一九三六年六月九日）[1]文芸・政治の両領域で激烈な波乱を巻き起こし、その後さらに深甚なる影響をもたらした。しかし、この書信そのものについてのみ論ずるなら、文芸の角度からであれ、思想の角度からであれ、最大限控えめに言っても、魯迅の「基準以下」の作と言うほかない。「美的享受」を読者にもたらさなかったばかりでなく、「真なる

ものの啓示」についてはさらにお話にならない。病中の口述であったため、言葉は魯迅スタイルの常なる輝きを失っている。私たち読者が目にするのは、筆録者馮雪峰のだらだらと行きなずむ「硬訳の筆法」のみである。内容について言えば、まったく驚くばかりだ。作者のロシア革命史に対する知識がかくも貧弱なことに驚くとともに、いい加減なことを論拠としているのにはもっと驚いた。トロツキーが革命前にシベリヤ流刑になった際、「おそらくパンの一切れをくれる人すらいなかったろう」と言っているが、作者はトロツキーが二度流刑されたが、そのたびに脱走した事実をまったく知らないことがわかる。[2] 氷雪に覆われた酷寒の地、交通困難で人煙まれな上、到るところ警察だらけのシベリヤから脱走に成功したということは、進んで「パンをくれる人」がいたばかりでなく、幅広い共感と大衆の援助とが必要だったからである。今では某人［トロツキーを指す］は敵の金を「使わざるを得なくなった」と言いたてているに到っては、この良知を備えた文豪に深い悲哀の念を抱くばかりである。ひとたび党派紛争の中で染まってしまうと、普段は痛罵していた「ルーブル説」［魯迅ら左翼作家はソ連からルーブルをもらっているという当時反動派からなされた中傷を指す］[3] すら武器に「持ち出して使わざるを得ない」のである。これはまさしく魯門［魯迅学派、ほどの意か］の傷である。

とはいうものの、この書信は有名であるばかりでなく、天にまで祭り上げられてしまった。毛沢東を初め、かつて中共の政論家と文芸史家たちは一再ならず、この書信を褒めそやし、論拠として引用したのであった。その理由はなにか？　それは極めて単純である。中共指導者の要求、とりわけモスクワからの要求にちょうどかなったからにほかならない。この要求とは、どんな手段を使ってでもトロツキーのイメージを汚し、一切の顧慮を排して中国トロツキー派の声望に傷をつけなければならないということであった。

魯迅のこの書信のこうした意味については詳しく討論するに値する。しかし、ここで私は討論したいとは思わな

い。この方面の様々な問題については、近年すでに多くの人々が語ってきたし、それも当を得ていた。例えば、一丁の著『魯迅，其人、其事及其時代』[4]や私の回憶録（『双山回憶録』[5]）の中でもかなり詳細にこれらの問題について語られている。

ここで私が語ろうと思うのは、当時魯迅に書信を書いた人についてである。

（二）

結局のところ、魯迅にまず書信を書いたのは誰なのか。このことは当時、さらにはその後も長きにわたって、人々があれこれあて推量する謎となっていた。魯迅の返信と同時に発表された原信が「陳××」と署名されていたので、多くの人は、なんと書いたのは当時国民党に監禁されていた陳独秀ではないかと推測した。頭は見えるが尾は見えないという不思議な感じが、無意識のうちにこの書信に幾分重みを加えたことも、より多くの人々の注意と関心を引きつけた。

解放前に出版された『且介亭雑文末編』［許広平編定、上海三閑書屋、一九三七年初版］と『魯迅三十年集』［上海、魯迅全集出版社、一九四七年初版、全三十冊。同年、大連、光華書店重版］に、この書信が収められたが、この「陳××」については何も注は施されなかった。解放後、魯迅の著作は大量に出版され、この反トロツキーの書信はより広範に流布し、中学生［中国の中学には初級中学と高級中学があり、戦後日本の中学・高校に相当］の国語の教科書にまで載った。しかし、投書者の正しい姓名が公にされたのは、私の見たところでは、一九六一年、人民文学出版社が出版した『魯迅全集』に始まる［一九五六年～五八年にかけて出版された人民文学出版社版『魯迅

全集』全十巻のことと思われる]。関連する注で編者はこう言っている。「書信を送ってきた陳××の原署名は陳仲山である」と。陳仲山がどういう人物かについては、また陳独秀の変名かどうかについてはまったく言及がない。そのため、読者大衆にとっては、この謎は依然として解けなかった。

馮雪峰はかつて考証したことがある。「聞くところによれば、陳仲山は神州国光社の下っ端編集者である」と（『魯迅研究資料』第一輯、第五一頁参照）。[6]

一九八一年新版の『魯迅全集』注釈者は「陳××」について、かなり詳しく説明を行い、こう言っている。「来信者陳××の原署名は陳仲山、本名は陳其昌である。複数のトロツキー派分子の回想録によれば、当時陳はトロツキー派組織の臨時中央委員会の委員であった」と。

ここではっきりと読者に、陳仲山は陳独秀ではなく、陳其昌であると告げている。陳其昌は某書店の下っ端編集者ではなく、当時のトロツキー派組織の一指導者であった。これは従前の報道よりはずっとましなものである。しかし、陳其昌とはつまるところいかなるトロツキストだったのか、また陳と、魯迅が書信中であからさまに非難したり密かに諷刺したりした醜悪な行いとは、どれほど関わるところがあったのか、あるいは相似たところがあったのか、注釈者は一言も言及していない。むしろ読者自身に推測させて、自ら好きなように結論づけることを願っている。あるいは注釈者はそうするほかないのだ。

陳其昌というこの人物を完全かつ全面的に紹介しようとしたものを、私は最新の『新文学史料』（一九八五年第三期）のある文章で初めて目にした。文章のタイトルは「陳其昌其人其事」、作者は史明。文は長くはなく、事柄に対する見方も相変わらずだが、重大な意義と歓迎に値する意図を有してないとはいえない。なんとならば、作者はとにもかくにも、かなり詳細かつ客観的に陳其昌の生涯を叙述しようとしているからである。従前、魯迅が叱責

した「陳××」は「民族の裏切り者」に区分され、それは中共の何千件もの翻し得ないこと鉄のごとき案件の一であった。この案件を少しでも改めよう、あるいはいかなる方法であれ、「民族の裏切り者」というイメージを軽減しようとするなら、それは例外なく、党禁に触れることとなった。しかし、史明君の文章は、陳其昌の生涯を報道するだけでなく、その「最期」をも明らかにした。これは中共史家がこの禁区で行った空前の画期的突破と言わないわけにはいかない。つまるところ、過去の所説とどう違うのか、以下の数段を見て頂きたい。

「陳其昌、またの名を陳清晨、河南洛陽の人。北京大学卒業、一九二五年中国共産党に加入。大革命敗北後、上海に住む。一九二九年、陳独秀、彭述之、鄭超麟らの人たちが組織した「無産者社」に参加し、陳独秀を初めとする六十一名[7]とともに、党中央へ提出した意見書に署名、これによって党を除名さる。一家三人は売文で生活しており、しばしば北新書局出版の「学生界」に投稿していた。妻も時に人の手伝い仕事をしたが、生活は相当苦しかった。

一九三一年五月、当時四つあったトロツキー派の小組織が……連合して「中国共産主義者同盟」を結成した。同年八月［五月とすべき］と翌年十月、陳独秀……らが前後して国民党に逮捕されたが、陳其昌はこの時期、幸運にも難を逃れた一人だった。一九三二年十月、陳独秀らの逮捕後、陳其昌は前後して趙済と蔣振東［ともにトロツキー派組織のメンバー］……らを訪れ、何とかして逮捕されていない人たちを探しだし……臨時組織を形成して混乱後の事態を収めてから、徐々に発展させようと企図したが、そうした願望はずっと実現することはなかった。しかし、其昌はなおもいくつかの個別的な活動を行った。たとえば、「九・一八」［一九三一年九月十八日に日本帝国主義が発動した所謂満州事変］事変の発生後には、抗日の高まりの中で、上海に出現した各界の抗日救国の大衆組織

の一つに「上海著作者抗日協会」があったが、陳其昌と趙済とはこの「協会」に参加し、抗日工作を行った。一九三六年春、……陳其昌は魯迅先生と「左聯」の一部指導部との間に矛盾があるのを察知し、この機に乗じて魯迅先生に手紙を書き、自分たちの「政治主張」を宣伝しようとした……これが、原因で魯迅先生は上述の義を踏まえて容赦のない返信を書いたのである。……

一九四一年十二月八日、太平洋戦争が起こり、日本帝国主義は上海全体を占領すると、直ちに大規模な捜査と逮捕を行い、陳其昌は痛ましくも殺害された、これこそが陳其昌の最後の結末である。」

史明君はここで、まず、陳其昌がなんと一九二五年入党の古くからの共産主義者であったことを読者に語っている。陳其昌は一貫して陳独秀を擁護し、後には陳独秀に従って中共の左派反対派（トロツキー派）に転じ、党を除名された。史明君の文章はさらに、陳其昌は生活が苦しかったが、トロツキー派組織の維持のために力を尽くし、抗日工作に参加したと言っている。こうしたことは、以前の中共史家が決して報道したこともなければ報道しようともしなかったことである。陳其昌の「最後の結末」、つまり、上海で日本帝国主義者に逮捕され殺害されたことについて言えば、これは中共史家にとってはより一層厳しいタブーだったのである。というのは、これは陳其昌の、魯迅の叱責に対する最終的かつもっとも有力な答え、「我は我が血を以て軒轅に薦めん」［魯迅の旧詩の一。軒轅は伝説上の帝王、漢族の起源とされる］ということになるからである。

史明君の文章はなんと、こうしたトロツキー派の歴史的事実を「美化」するに足る、真実を公にしたのだが、これは誠にもって一通りのことではない。ここから、私は、これが作者の個人的な「科学的良心」を反映しているばかりではなく、中国国内の人々が近年来努めて獲得しようとしてきた歴史に真実を取り戻さなければならないという巨大な闘争を反映しているのだという希望をもつものである。

私はこの闘争を熱烈に支持し、この真実を求める企てをこころから歓迎する。これは陳其昌個人のため、つまり彼の身の潔白が回復されるからというだけでなく、中国の革命事業全体のためでもある。なぜなら、歴史的真実を好き放題に抹殺、顛倒したり、政治的異見の持ち主に勝手に罪名を加えたりすることは、どんな革命組織であれ、政治的思想的堕落の標識であり、同時にそれら組織の堕落の一因であるからだ。中国が「信任の危機」から本当に脱却しようとするなら、私はまず歴史において真実を求めるという方面において、人々の継続的な努力を許容するということが必要であると思う。

（三）

陳其昌は私の昔の同窓である。一九二六年から付き合い始めて、一九四二年日帝に殺されるまでの長年、其昌と私はずっと一緒で、喜びも苦しみもともにした。其昌の生涯、その思想と性格については、私はかなり正確に知っており、またかなり深く理解していたと、自信をもって言える。そうしたことをあるがままに書くということが、私のような後に残された者の責任であろう。

史明君のこの簡単な伝記の基本的立場は明らかに中共のオーソドックスなそれである。しかし、同様に明らかに、彼はこの立場を擁護するために故意に事実を歪曲したり捏造したりしてはいない。確かに、文章中多くの事実に合わない叙述があるが、それは著者があまり信頼出来ない史料にもとづいているせいである。そうした誤りは、本文の中で私が随時指摘していこう。

陳其昌は私より七歳年長であり、大学では三学年上だった。しかし、其昌と私が知り合ったのは、同窓生だから

ではなく、同志であったからである。其昌が中共に加入したのは私よりも早く、私が一九二五年末か一九二六年初めに中共組織に参加したときには、其昌はすでに北京大学党支部の指導者の一人、支部幹事だった。李大釗らが捕らえられ、殺された時、其昌は中共北京東城区区委（当時は区委ではなく部委と呼んでいた）だった。年齢、学年クラス、工作部署の違いなどから、当時私と其昌は知り合ってはいたものの、互いの間の関係や理解の度合いは私と王実味[8]の間ほど近しくはなかった。其昌と私が友人つまりは普通の同志関係から知己朋友となったのは、その四年後、上海で中共左派反対派の活動を一緒にした時に始まる。

反革命が高らかに凱歌を奏で、その統治を強固に打ち固めようと努めていた当初の数年（一九二七年下半期から一九三〇年に到る時期）間、多くの共産党員が脱党し、また多くの共産党員が烈士となった。陳其昌と私は怯懦や屈辱の道を歩むことはなかったが、幸いにも少なからぬ危機を切り抜け、命を落とすことはなかった。

私たちはふたりとも［中共］党内に留まって、闘争を続けた。ただ、工作の場所や部門が異なったので、お互いに消息を問うこともなかった。其昌と私が再び顔を会わせたのは期せずして私たち二人が、中共内部の反対派となって以降のことである。陳独秀は「政治意見書」を起草し、ソ連共産党内の反対派の主張に賛同した。八十一名（史明文書のいうような六十一名ではない）の中共の古くからの幹部がこれに署名し、陳其昌もその中の一人だった。果たせるかな、其昌はその他すべての「陳独秀派」とともに、中央によって除名された。私はその二年前からすでに反対派だったのだが［王凡西は一九二七～二九年のモスクワ留学時期にトロツキストとなっていた］、この時トロツキー派の主張を放棄することを拒否したため、やはり中央から逐われた。当時上海には四つのトロツキー派組織があり、其昌［無産者社］と私［十月社］とは別々の派だった。四派の統一協議が行われている時期になってやっと、私は其昌と再会したのである。

記憶ではそれは一九三〇年冬のことで、其昌がわざわざ私を訪ねてきて、陳独秀と会わせるというのであった。その時また其昌は、自分の家族が上海にいるので、家に食事に来て、家族の顔を見がてら、別れて以後のことどもを語ろうと誘った。これは、私が其昌の家の客となった最初で最後の機会であり、また、最初で最後の其昌との「社交的」な付き合いだった。工作のために、其昌は一人で租界に一間の屋根裏部屋を借りており、その後の私と其昌との接触はすべてこの屋根裏部屋で行われた。其昌は家族を閘北［上海の地名、現在の虬江路以南、長寿路橋以東、虹口港以西辺りを指す。一九二七年、正式に区となる］郊外に住まわせ、大体毎週一、二度、会いに帰っていた。一家数人（当時彼にはすでに一人あるいは二人の子供があった。其昌はその後、二男一女をもうけた。[9] 史明の言う「一家三人」というのは不正確）が住んでいたのは、普通の農家で、部屋のしつらえもとても粗末なものであったが、非常にきれいに片づいていた。一目で一家の生活がひどく貧しいことがわかった。しかし、すさんだ様子はすこしも見て取れなかった。ほんの短時間いるだけで、客の方は、主人の家には「貧しいながらも楽しい」雰囲気があると感じ取れ、気分をさわやかにしてくれるのであった。夫人［尚延芳、一九〇〇～一九九一］と其昌とは同郷で、伝統的な結婚であった。夫人は質朴誠実で、極めていい印象を私に残した。当時私がこの家の主人と何を話したか、すでに半世紀あまりを経てしまい、ほとんど完全に忘れてしまった。一応はっきりと記憶に残っているのは、わずかに二つのことだけだ。一、もてなし料理にカボチャとニラがあったこと。二、其昌が、一九二七年秋に北京を離れ山東で一時期工作に当たり、それから上海に来てずっと江蘇省委系統下で労働運動を行っていたと語ったことである。

この一緒の食事から数ヶ月後、一九三一年五月初め、中国トロツキー派組織は統一し、「中国共産党左派反対派」（史明の文がこれを「中国共産主義［者］同盟」と言っているのは不正確で、この名称［中国共産主義同盟］は一

九三五年に初めて採用したものだ）が成立した。そこで何事もなければ、其昌と私はまた一緒に仕事ができることになったわけだ。しかし、非常に不幸なことに新組織は誕生後一月もたたずして、私と他の複数の指導的同志たちが国民党に逮捕され、あっという間に四年が過ぎてしまったのである。一九三四年冬に出獄して上海に戻ったところで、私はやっとこの旧友とまた協力できることとなったのである。その後七年、其昌と私は近しく共同して工作に当たった。

陳其昌がこの間、あるいは中国トロツキー派運動の全期間にわたって、結局のところ前後いかなる工作を行い、いかなる役職を担当したかについて、私はここで縷々言挙げしようとは思わないし、その手の詳しい説明も意味ないことだ。真の革命家は、地下の小組織であれ、執権党の大政党内であれ、世俗的な権力や地位を計算したり、重視したりは決してしないものだ。其昌の権力や地位についての考え方もまさにそのようなものだった。私がもし、其昌の「官職」や「肩書き」を一々数え上げることでその重要性を明らかにしようとしたなら、この旧友に対してこの上ない侮辱となるだろう。

ここでは私はただ私の「回想録」から以下の言葉を摘録しておくこととする。

「一九三一年から一九三七年までの白色テロが猖獗を極めた時期、中国トロツキー派組織は次々と破壊されていった。破壊されるたびに、苦労のいる再建工作をおこない、組織を一線で存続させたのは、いつも決まって私たちのこの「兄貴」だったのである」[10]

このような工作は取るに足らないことで、言うまでもないことであろうか？　もちろんそんなことはない。逆に、

極端に反動的な政権の下で奮闘し、秘密工作に従事する革命党にとって、これはもっとも得難く、尊いことなのである。この工作をうまくやり遂げようとすれば、いくつかのこの上なく高い品格を備えていなくてはならない。そして陳其昌はとりもなおさずそうした品徳を十分に備える数少ない一人だったのだ。

（四）

陳其昌が大学で学んだのは教育だが、その後経済専攻に転じ、古典派経済学、マルクス経済学の両方を修めていた。[11] 其昌は文学は学んでいなかったが文章はとてもうまかった。専門的な学問と技能を持つ学者を非常に尊敬し、また抜群の文筆才能を持った作家を崇拝した（以前からとりわけ魯迅に敬服していた）。しかし、其昌自身は「何々家」を自称したり自認したりすることは決してなかった。其昌がその短い生涯で最長の時間と最大の精力を傾注したのは、革命組織の建設、強化、発展という点であった。其昌が最も嫌ったのは、無為空論の革命家だった。地道な実践こそ其昌のすべてであった。陳独秀はこの点で其昌を非常に高く評価し、其昌の前向きな仕事ぶりや、大衆の中で活動できるがゆえに現実をつかむ能力があり、教条にとらわれないことを一再ならず賞賛したことがある（陳独秀の一九三七年十一月二一日付、上海の友人たちへの書信を参照）。[12]

端的に言って、陳其昌はレーニンが提唱した「職業革命家」の典型的人物であった。こうした人物がロシア十月革命を成し遂げたのである。またこうした人物が中国共産党の革命を促進したのである。中国トロツキー派の革命運動は敗北に終ったが、陳其昌のような典型的人物は敗北によってその意義と光彩を失うなどということは決してないのだ。

革命的大政党の「職業革命家」となることは比較的簡単なことだ。なぜなら、党には十分な経費があり、すべての時間と全精力を注いで革命に従事する党員たちの生活を保証することができるからである。少なくとも彼らの最低限の生活を保障することができる。弱小革命政党では、たとえば、中国トロツキー派がそうだが、事情は大違いである。中国トロツキー派には国際的支援が一切ないばかりか、多額の党費があるわけでもなかった。そうした「職業革命家」たちは、受け取る給料がないだけでなく、何とかして組織の必要とするお金を工面しなければならなかったのである。彼らは「兼職」を捜したり、ちょっとした「副業」に就いたりして、それで本人や家族の生活を維持しなければならず、同時に組織活動の経費を提供しなければならなかった。政治反動と経済衰退という環境にあっては、革命家にどんな「兼職」や「副業」が捜せただろうか。売文業以外にほとんど道はなかった。

確かに史明君の文章が言うとおり、陳其昌は「売文生活」をしていた。しかし、其昌がいつも投稿していた雑誌は、私の記憶では「学生界」ではなく、「青年界」[13]と言った。其昌はほぼ毎月、この雑誌のために「陳清晨」の筆名で一、二編の文章を書いており、決まって二十元ほど（この金額は当時、小学校教員の一月分給料より少し低かった）を得ることができた。この関係は張友松が其昌のために北新書局とつけてくれたものである。当時、北京大学出身の同級生たちの多くが南京政府の高官となっていたが、其昌は彼らとはまったく交流がなかった。張友松も北大出身で、李大釗[14]とともに殺害された張悟蘭の弟らしかった。張友松はトロツキーの『英国は何処へ』を訳したことがあったが、トロツキー派メンバーではなく、共産党に入ったこともなかったが、其昌とは個人的な付き合いが深かった。

このほか其昌は小新聞（記憶では「社会日報」[15]だったと思うが）にも経済分析の記事をちょっと書いており、毎月二十元ほどを得ていた。一家五人はこのわずかな収入で生活を維持していたのである。これに頼って妻子を養っ

ていたのみならず、このとき其昌はその上、自分よりもっと生活の手だてのない友人たちを援助していたのである。例えば、王実味にも其昌はいつも援助していた。王実味と［その夫人］劉瑩は二人目の娘を生んだとき一文無しだったが、其昌は一家の「貴重な衣服、日用品」を総ざらいして質屋に入れ、その金をこの昔の同窓生夫婦に持たせ、危機を乗り切らせたことがあった。

こうした方面での陳其昌について、私はかつて『回想録』の中で、以下のようにまとめたことがある。

「苦労しながら貧に安んじ、決して生活の楽しみを享受しようとしない……彼には新式の同志愛と旧式の義侠心が混ざり合っていた。一般同志の生活と安全に対しは行き届かぬ所はいささかもなく、そこで、『兄貴』というあだ名で有名であった」[16]

陳其昌のもう一つの特徴、すなわち彼自身それゆえに優れた「職業革命家」となり得、また前後して中共と中国トロツキー派内で優れた秘密工作の組織者となり得たところのもう一つの品格とは、注意深さ、大胆さそれに節操の堅さであった。省力のためにここではさらに私の著作から関連する数行を引くにとどめたいと思う。

「其昌は悪を憎むこと、仇敵を恨むが如くであった。すべての虐げられ、侮られた者たちにこの上ない慈悲憐憫の情を抱いた。偉ぶることを最も嫌い、指導者面したもったいぶった態度をとらなかったばかりでなく、最後までわが身を危険な最前線に置いた……其昌は秘密工作においては非常に注意深く、その警戒心は決してゆるむことはなかった。そこで、一度ならず発生の可能性のあった組織の大破壊は其昌の事前の察知と勇敢さに

よって救われたのである。もっともよく知られているのは、其昌が寒君[17]の家の玄関口で特務に逐われ、手だてをつくして自身も危機から逃れたばかりでなく、寒君をも救い出した時のことである[18]」

「職業革命家」は数えきれないほどであり、細心にして大胆な者はいくらでもいたが、節を守り通す者はかなり少なかった。多くの冒険家型「職業革命家」たちはしばしば細心にして大胆なあまり、思想と認識の堅固さが足りなかった。ひとたび事が起って、虎穴にはまると、こうした人たちは極めて簡単に「職業」を変え、「虎打ちの猟師」から「凶暴な虎そのもの」に変わってしまうのである。其昌はといえば、この三点をすべて備え持っていたため、その運命も自ずから彼らと違うものとなったのである。

国民党統治時代、その特務は中国トロツキー派の重要分子をほとんど全員逮捕してしまった。陳其昌は長期間彼らの逮捕対象だったのだが、結局その手に落ちることはなかった。これはもとより、幸運だったという面もあるが、一方、其昌が細心にして勇敢だったということも大いに与っている。日本帝国主義の蹂躙下、其昌は積極的に抗日活動を行い、それは史明の文章が言う「上海著作家協会に加入した」だけではなかった。其昌は筆力を利用しただけなく、行動にも訴えた。文筆面だけでも、其昌は組織の地下刊行物「闘争」に締め切りごとに日本傀儡政府の経済的困難について書き、亜東図書館[19]のために小冊子を編纂し、さらには私たちの「合法」刊行物「動向」の編輯にも参加したことがある。実際活動の方面では、学生の中だけでなく、上海の一部労働者（主要にはフランス租界のトロリーバス労働者と紡績労働者）の中でたゆまぬ工作を行った。

こうした工作ぶりでは、いかに其昌が細心且つ勇敢であっても、早晩どうしたって敵の察するところとなる。其昌は手配され、逮捕されてしまったのである。まさに諺にいうところの「山に登ることが多くなればついには虎と

出会う」というものである。其昌はついに一九四二年の春（正確な日時を私はもう思い出せない）日本憲兵によって逮捕されたのである。これは其昌にとって最初で最後の逮捕だった。獄中でひどい拷問を受けたが、其昌は組織の秘密を堅く守って漏らさず、遂には日帝に殺されたのである。享年四十二であった。

其昌のこうした節を曲げない性格は、［この逮捕で］試される前からとっくに同志友人たちの賞賛の的となっていた。其昌がひとたび逮捕されるや、皆はもう彼は生きて戻ってくる望みはないと感じた。なぜなら、皆は其昌が危険に臨んで志を曲げたり、友人を売って自らの生を求めることはないことを堅く信じていたからである。当時のある出来ごとを、私は非常にはっきりと覚えているが、それはここで触れておくに値する。其昌はかつて亜東図書館のために三冊の本を書いたことがあった。一、『真理は前進しつつある』（署名は江維亮）二、『人口西遷と中国の前途』三、『海南島と太平洋』（以上の二著の署名は陳清晨）。[20] それで、亜東図書館の汪孟鄒先生とは相当親しい付き合いをしていた。其昌の変事が起こると、ある人たちは汪先生に、日本の憲兵が来たときのために、ちょっと心づもりをしておくよう促したが、汪先生は悠揚としてこう言った。「兄貴は人を巻き添えにしたりすることは絶対にあり得ないと信じている。まったく問題ない、問題ない」と。

まさしくその通りであったことを、事実は証明したのであった。

（五）

陳其昌は決して行動のみで思考しないというような人ではなかった。其昌はいかなるたぐいのものであれ、「すべて派」ではなかった。地道な実践を重視し、空論を蔑視したが、自分が一心に実践していた思想、つまり路線に

対しては、ひたすら迎合することもなければ、敢えて疑義を抱いたりすることもなかった。スターリン＝ブハーリン路線が中国の第二次革命［国共合作による、国民革命期を指す］を葬り去ったことを知ったとき、其昌は毅然としてその路線を捨て去り、党を除名されても所謂「陳独秀・トロツキー集団」に参加したいと願った。後に、長期にわたりトロツキー派の主張を広めようと企図して度重なる困難に直面したとき、其昌も深刻な思想的苦悶に陥ることがあった。陳其昌の思想的苦悶を語ることは、彼個人の別の側面を明らかにするばかりではなく、中国革命に関わる複数の戦略的路線を理解する助けとなるかも知れない。

文章の性質からして、私がここで中国革命の根本路線の大問題を議論するのは適切ではない。ただ簡単にそれを説明しようというのは、ひとえに読者諸君をして、陳其昌がなにゆえあれこれ思想的に苦悶したのかを、より理解しやすくせんがためである。

後進国と植民地革命の問題を世界革命の次元にまで引き上げ、先進国の社会主義革命同様に重要視し、それゆえ後進国・植民地特有の戦略と戦術を独自にかつ丁寧に研究し、規定したのは、主としてレーニンであった。

レーニンはこの方面において間違いなくマルクス主義を発展させた。「すべての国のプロレタリアートは団結せよ」というこの総路線は、レーニンによって「各国のプロレタリアートと全世界の被抑圧民族は団結せよ」というスローガンにまで拡張された。

しかし、レーニンがこの見解を十分かつ具体的に実行できたのは、ロシア十月革命が勝利して第三インターナショナルが成立して以後のことである。コミンテルン第一回大会（一九一九年三月）には二人の中国人が参加したが、[21] 植民地問題や中国革命についての討論はなかった。この問題は一九二〇年七月から八月に開催されたコミンテルン第二回大会で、初めて正式に提起され十分討議されるとともに、根本的な戦略と戦術が決定されたのである。それら

は大会が決議した「民族と植民地問題についての決議」と「補充決議」の中で規定され、さらにレーニンとその他の代表たちの発言によって、詳しく表現されている。主な内容は以下の諸点にまとめられる。

一、植民地と半植民地国家においては、ブルジョワ民族民主運動と、農民と労働者大衆の自らを解放せんとする大衆闘争とがすでに同時に存在している。両者の目的と利益は遠く隔たりつつあるが、前者はしばしば後者を抑制する。

二、コミンテルンと当該国の共産党はこうした抑制に反対し、労働者と農民の覚醒向上を助けるべきである。

三、しかし、外国資本の統治を転覆するためには、コミンテルンは植民地と後進国のブルジョワ民主派と暫時協力し、ひいては連合しなければならないが、かれらと混然一体となってはならず、プロレタリアートがまだ萌芽状態のときにあっても、その運動の独立性は絶対的に保持しなければならない。

四、コミンテルンの最重要にして必要な任務とは共産党を建設し、発展させることである。

中国共産党はまさしく、こうした認識と必要に基づいて、この翌年（一九二一年）に成立したと言っていい。中共はまさに、こうした立場に従って、工作を展開し、国民党との間の接触も進めたのである。同時にまさしくこうしたいくつかの原則的立場に対する解釈と執行方法の違いによって、一九二四年から一九二七年までの中国の革命期の戦略論争が起こったのである。

当時、ソ連共産党内では、スターリン派とトロツキー派の対立が起こった。両者は世界革命に関する三つの問題で争ったが、その一つがほかならぬ中国問題であった［他の二つとは、ソ連指導部の政策問題といわゆる英露委員

会問題」。そして中国問題の主要な分岐とは、上述したレーニンの立場に背くのか、従うのかという点に帰結した。

ソ連共産党左派の考えに従えば、当時の中共が国民党に加入し、その規律に服従して、三民主義を信奉し、さらに前後して蔣介石、汪精衛を頂き、彼らに反帝反封建の革命の徹底を領導してもらおうと希望したことは明らかにレーニンの定めた原則に背くことであり、大きな誤りをおかし、革命の利益に背くことにさえなるであった。

当時の中国革命の敗北は確かにソ連共産党左派の指摘を証明するものとなった。それゆえ実際に革命に参加した中国の共産主義者たちは、自分たちの経験に基づいて、後にソ連共産党の中国革命問題に関する論争を知ったとき、この革命の第一の指導者陳独秀を含む多くの人たちが、トロツキー派の意見を受け入れ、中国共産党の左派反対派となったのである。

陳其昌はまさにこうした人々の一人であった。其昌のこの時の選択は、本当にいわゆる「水が流れて水路となる[物事の自然な発展をいう喩え]」であり、筋道だって道理にかなうもので、思想上いかなる苦悶もほとんど経験しなかったのである。

革命敗北という新たな状況下で、トロツキー派は普通選挙で全権を持つ国民会議を中心とする革命民主政綱を提起し、これをもって再び大衆を団結させ、新たな革命を準備することを望んだ。この立場は、権力を掌握するスターリン派の見方、つまり、革命は敗北してないばかりか、逆にさらに高次の段階、すなわち武装蜂起をもってソヴィエト政権を建設する段階にまで入ったとする見方とは極めて鮮明な対照をなしていた。冷静な客観的現実的状況との照合によれば、どちらが正しく、どちらが間違っているかは、一にも二にも明らかであった。其昌は前者の立場から工作に努め、物質的生活がいかに困窮していようと、心はのびやかにしてその内に喜びを見いだしていた。

其昌の思想が苦悶し始めたのは一九三八年のことである。当時中国の抗日戦争はすでに二年を経過していた。戦

争は敗北続きで、広大な国土が敵の手に落ち、上海は「孤島」となり、陳其昌とトロツキー派のその他の指導者はともにこの「孤島」に留まった。当時のトロツキー派の工作方針とは、上海を拠点とし、敵の後方にいる労働者、学生および一般大衆の中で、宣伝と組織工作を行い、それでもって力を蓄積し、自らの組織を強化、拡大し、敵に打撃を与え、戦争勝利を促し、同時に新たな革命の到来と勝利を準備するというものであった。

こうした工作路線は、組織自体の力量が弱ことから、同時にまた都市労働者をリーダーとするという伝統的立場から出発して確立したものであった。(原注1)

主観的要素からであれ、客観的要素からであれ、こうした路線は当時、唯一実行可能でそれゆえ正しい路線であった。その他のトロツキー派指導者とともに、陳其昌はこの路線を擁護し、また最大の熱意をもって、これを推進した。しかし、努力すればするほど、其昌は困難を感じ、気持ちはますます沈んでいった。当時其昌はよく私にこう言ったものだ。「我々には目標はあるが、その道筋がない。方針はあるが、その方法がない」と。其昌は目標に到達するべき道筋をさがし、方針を実現すべき方法を考え出そうとしていたのである。このため、其昌はほとんど「寝食を忘れる」ほどであった。

客観的現実はこのようなものであった。工場の西遷、戦争の破壊、さらには日本の軍事当局による系統的な破壊工作を経て、「孤島」上海の産業は極度に凋落した。当時、上海の繁栄は完全に、投機、相場その他あらゆるでたらめな消費事業の上に成り立っていた。労働者階級は解体してはいなかったにせよ、少なくとも異常なまでに意気消沈し、分散化していた。労働者を組織し、反帝闘争を行おうとすることはまったく不可能だった。たとえ、そうした労働者の中から少数の先進分子を探しだし、抗日革命家に教え育てようとしても、それは非常に難しかった。学生の状況は労働者よりも少しばかりましのようだったが、大差はなかった。理想を持ち、それを実現しようとす

る意志をもった若い知識分子はとっくに内陸部に向っていた。「島」［上海を指す］に残った者は現状に安んじる惰弱な者と言っても差し支えなく、少しでも志気のある者の大多数は、延安に気持ちが傾いていた。前者であれ、後者であれ、トロツキー派の立場を受け入れるのはたやすいことではなかった。「孤島」を出ると、ではどうだったろうか。どこでも腐敗と混乱という局面の中、唯一の闘争だけが現実的であり、可能性があるように思われた。つまり、武器をとって、武装した弾圧者とその漢奸の走狗たちに反抗することである。しかし、こうした闘争について、当時の上海のトロツキー派中央は、陳其昌も含めてだが、自力でできるものではなく、また、理論的にも許されるものではないと考えていた。

ではどうしたらいいか。一部の者たちは、革命のなすべき事柄は、文章をちょっと書いて、新聞を出すことに尽きると考えた。文章を載せ、新聞を発行すればそれで任務は成し遂げられ、万事めでたし、というのである。こういう者たちにとって、上述の局面のために苦悩するなどということは決してあり得なかった。しかし、陳其昌はただペンを振るうだけの文章家ではなく、着実な実践を重んずる革命家であった。其昌は新聞を発行して文章を書き、自分たちの目標と方針を宣伝するばかりでなく、さらに一定の進路にしたがって、ある方法を採用することでこうした目標と方針を実現しようとしたのである。この一歩が達成できないうちは、其昌は決して満足できず、それゆえ苦悩したのである。

どのようにしたら、この主観と客観、理論と実際の間の矛盾に発する苦悩を解決することができたであろうか。読書（例えば革命の巨匠たちの経典著作を学び直すような）も一つの方法であり、「調査研究」もまた一つの方法であった。性格がそうさせたのであるが、其昌が歩んだのは、後者の道であった。一九三八年の夏ごろ、其昌は「孤島」を離れ、抗戦の大後方を実地に見て、その上で、自分たちは結局いかになすべきかを決めようと決意した。

こうした決意を固めることは実際、並大抵のことではなかった。一家五人は其昌の筆一本が稼ぎ出す少ない原稿料に頼って暮らしていたのである。其昌が去ってしまえば、どうやって暮らしていくというのか。それに、これは旅行などではなかったのである。其昌はより有効でより実際的な戦闘の道を捜すべく旅立つのであり、それ自体すでに戦闘だったのである。前途は険しく、予想もつかず、その後また妻子と再会できるかどうか、なんとも言えない状況だった。しかし、それにも関わらず、其昌は意を決し、どうにかこうにか、家族のために「赴任手当」を工面して、ついに旅立ったのである。旅立つその日、其昌は私に別れの言葉を告げに来た。其昌が言うに、家を出る時、妻は何も言わず、子どもたちはよく眠っていた、と。其昌はわが家の戸を押し開け出て行くとき、こちらを一瞥しただけで、しっかり見つめることはできなかった。これは、私と「兄貴」の十数年にわたる交友の中で、たった一度だけ見た其昌の「英雄気短し［英雄の剛毅はかえって情にほだされやすい、の意］」の場面であった。

其昌はまず香港に行き、一、二ヶ月留まったが、その時、後に広東中山で抗日ゲリラ戦を行った陳仲禧[22]と一緒に住んでいた。この二人はともに空論を崇めることのない革命家であり、思想、行動において少なからず共通点があった。最後も同じく、ともに、日本帝国主義者に殺害されたのである。

香港の当時の状況は上海よりもずっと良かった。まだ戦争被害は受けておらず、植民地当局も抗日活動を意識的に黙認していた。其昌の気持ちもかなり楽なものだった。しかし、其昌はそれでも内地の大後方［抗日戦中、国民党統治下にあった四川・雲南など西北、西南地区を指す］を見に行くことに決めた。この時ちょうど、メキシコのトロツキーから、陳独秀の出国を勧める書信が上海に届き[23]、これを陳独秀に届ける特別の役割を担う者が求められた。陳其昌はすぐさまこの使命を負って香港を離れ、四川に向かった。其昌は広東、湖南などの省を経由し、陸路で四川江津に到着した。道中、其昌はできるだけ各地に散らばった友人たちと連絡を取り、さらに国民党の腐敗と

無能な指導下で行われている抗戦の実態を観察、体験した。江津では、其昌と陳独秀とは意見を交換し、問題を討論し、最後には陳独秀がトロツキーに宛てた手紙を携えて再び香港を経て上海に戻った。これは一九三八年末ごろのことであろう。其昌が上海を離れた時からおよそ半年ほどであった。

この半年近くに及ぶ沈思と苦行が、其昌の思想的苦悶を解消したかどうかについては何とも言えない。この時の調査、研究の最初の成果が、『人口西遷と中国の前途』（一九四〇年、亜東図書館出版）という小さな本として書かれた。この本は今、手許になく、印象はすでに曖昧なものとなってしまったが、記憶の限りでは、この書中の一部の予測は後に、ことごとく証明されたように思う。我々はつまるところいかになすべきかという問題について、其昌は明らかに陳独秀の影響を受け、「孤島」にあって新聞を出し、文章を書くだけというのでは、決して抗日と未来の革命のための最良の方法とはならず、ましてや唯一の方法でもないことを深く感じていた。其昌は本当に戦争の内に身を置くことを求め、他の抗日勢力と実際に接触して、可能な協力をなすべきだと主張した。其昌は我々トロツキー派の指導機関が徐々に抗戦の後方地に移ることを希望したのである。簡単に言えば、其昌が四川から戻って以後の考え方とは、とりもなおさず陳独秀が一九三七年末に武漢で行おうとしたやり方、つまり何とかして軍隊に入り込み、共産党とも国民党とも距離を置く政治党派と、ある程度までの接触と協力を行うというものであった。しかし、陳独秀の当時の計画は実現することはなく、陳其昌がさらに遅れて、しかもより不利な条件の下でこうした路線を実行しようとしても、もとより成功の望みはなおのことなかったのである。其昌が上海に戻ってから、日本憲兵に殺されるまで、おおよそ三年半の時間があった。この間、其昌は懸命により有効、確実に日帝に打撃を与える道を模索しようとしていたとはいうものの、彼の主要な精力は、我々の従前の工作、つまり文字による宣伝と組織建設の面に費やさざるを得なかった。

こうして、陳其昌の思想的憂鬱は終始、解消されることはなく、目標到達のための道筋を捜すという努力も結局成功しなかった。しかし、経験、教訓としての其昌の苦悶と追求は、すくなくとも、後の革命理論家たちにとって沈思に値する問題を提起しているのである。

「兄貴」往年の数多い思想的苦悶について、私はかつて大いに共感したものだ。後に中共が勝利するのを見て、また、中共が「馬上にて天下を得た［大衆的な政治闘争によらず、武力に依拠して政権を掌握したことを指す。唐の太宗の有名な言葉に、「馬上にて天下を得るも、馬上にてこれを治むること能わず」とある］」ことによってもたらされた正反両面の結果に、私はより一層、それまでに到る全過程についての全面的思索を迫られたのであった。それは、すでにあった苦悶を解消するため、つまりは勝敗の経験の中から教訓をくみ取り、将来同じ過ちを繰り返さないためばかりでなく、正々堂々と未来に立ち向かい、従来から正しいと判断してきた立場［トロツキー派の観点ということだろう］を堅持できるようにするためでもある。私はこれまでに私自身の探索の結論を書いてきた。その主なところは『毛沢東思想論稿』［香港信達出版社、一九七三年初版。新版は香港新苗出版社・台湾連結雑誌社の合同出版、二〇〇三年。執筆は一九六〇年代前半］という本に書かれている。極めて残念なのは、私たちのこの最も優れた実践者にして、もっとも積極的な思索家たる友人陳其昌が、壮年にして命を失い、私たちとともに切磋琢磨できないことである。

一九八六年一月

（原注1）

上に引いた「民族と植民地問題に関する決議」はプロレタリアートが革命を指導するという要求とスローガンを明

確に提起してはいない。またそれは共産党の工作をかならず都市を基地とし、都市が農村を指導するとも明確には規定したことはない。とはいうものの、こうした意味合いは多少ともその内に含意されてはいたのである。一九二二年五月、コミンテルン執行委員会が中共第三回［全国］代表大会に送った指示では、初めて以下のように宣言されていた。「疑問の余地無く、指導権は労働者階級の政党に帰属する」と。一九二五年一月、中共が開いた第四回［全国］代表大会はコミンテルン代表が起草し、可決した政治決議案でもって、初めて公式にプロレタリアートが中国革命において指導権を掌握すべきことを確定した。

これ以後、労働者の指導と都市を主とするというこの路線は中国の共産主義者によって堅持された。反対派がそうだっただけでなく、中央派もそうだったのである。国民党の弾圧機関が一九三四年以後、中共をあらゆる都市から撤退させ、中共を労働者階級から分離させた。その結果、中共は農山村地区に逃れて農民を組織して武装闘争をせざるを得なくなったが、この時にも中共は理論的にはなお労働者の指導と都市第一主義という路線を堅持していたのである。毛沢東も多くの文章で、このように［農村で工作］するのは戦略の改変ではなく、単に戦術上の迫られた迂回に過ぎないと説明していた。一九三八年十一月、つまり農民を主力とする武装闘争実践から十年を経て、毛沢東は中共第六期［第六回拡大］中央委員会ではじめて、旧路線に対して理論的に異論、つまり「農村が都市を包囲する」という方針を［正式に］提起したのであった。［毛沢東はこの会議で中央を代表して「論新段階（新段階を論ず）」という報告を行った。全文は『毛沢東集』第六巻（北望社、一九七〇年）を参照。その第七章は「民族戦争における中国共産党の地位」として現行『毛沢東選集（第二版）』第二巻（一九九一年、人民出版社）所収。なお、毛沢東はこの会議で、他にも報告を行っており、その一部は「統一戦線における独立自主の問題」、「戦争と戦略の問題」として上記選集同巻に収録されている］

モスクワは中共の指導する武装蜂起については支持したが、これに由来する「農村が都市を包囲する」という理論についてはいまだ「祝福」を与えていなかった。

訳注

（1）六月九日は執筆日付。『魯迅全集』（二〇〇五年版、以下同）第六巻「且介亭雑文末編」所収の同書信注によれば、本書信は同年七月の『文学叢報』月刊第四期と『現実文学』月刊第一期に同時に掲載発表された。「トロツキー派に答える手紙」をめぐる問題については、前掲「訳者解題」参照。

（2）中島長文編刊『魯迅目睹書目――日本書之部』（一九八五年）によれば、魯迅の蔵書にはトロツキーの『シベリア脱走記』槇宗夫訳、南宋書院、昭和二年（一九二七年）十二月十五日発行、が残されている。

（3）『魯迅全集』第四巻「『三閑集』序言」など参照。

（4）巴黎第七大學東亞出版中心、一九七八年。

（5）香港周記行出版社、一九七七年初版。同書増訂本は香港士林図書服務社、一九九四年。北京東方出版社版は二〇〇四年。邦訳は『中国トロツキスト回想録』矢吹晋訳、柘植書房、一九七九年。

（6）手許の魯迅研究資料編輯部編『魯迅研究資料』第一輯、爾雅社出版、一九七九年、の香港リプリント版では九四頁。胡愈之、馮雪峰著「談有関魯迅的一些事情」参照。

（7）王凡西がこの後で述べるごとく、史明は六十一名とするが、この文書には八十一名の署名があり、通常これは八十一名の意見書と見なされている。しかし、当事者である鄭超麟は、そのうちの約三分の一は、架空の人物であったと証言している。『鄭超麟回憶録』（諸版あるが）、北京東方出版社、一九九六年、内部発行、では二八六頁。邦訳長堀他訳『初期中国共産党群像』1・2、平凡社東洋文庫711・712では第二巻一六六頁。「我們的政治主張（我々の政治意見書）」の発表は一九二九年十二月。なお、陳独秀、鄭超麟らの中共除名は一九二九年十一月。王凡西の除名は一九三〇年春頃のこと。

（8）一九〇六～一九四七。河南の人。作家、翻訳家。王凡西の北京大学時代の同級生。王凡西より数ヶ月遅れて陳其昌の紹介で中共に入党。王実味は王凡西らがトロツキー派に転じて後も交流を続け、トロツキー派のために『トロツキ

ー自伝』などの翻訳をしたことがある。一九三七年、延安に赴き中央研究院に所属。中共幹部の特権を批判する「野百合花」などを書き、毛沢東によって整風対象とされた。一九四七年、延安に対する国民党の攻撃から避難すべく中共の要員によって護送されている途次、逃走の足手まといとなるとして、毛沢東の批准を経ずに、処刑された。王凡西は「談王実味与「王実味問題」（王実味と「王実味問題」を語る）」（香港『九十年代月刊』一九八五年年五月号）で、王実味がトロツキー派とは組織的関係を有しなかったことを証言。一九九一年、中共はこれを受けて最終的に王実味の名誉回復をおこなった。王凡西の当該文章も翻訳草稿ができているので、近いうちに本誌に掲載したいと考えている。なお、王実味問題とその名誉回復については、温済沢等著『王実味冤案平反紀実』（群衆出版社、一九九四年）、日本語論文に横澤泰夫著「王実味の名誉回復」（『熊本学園大学文学・言語学論集』第二巻一号一九九五年）がある。さらに戴晴著田畑佐和子訳『毛沢東と中国知識人』（東方書店一九九〇年）所載「王実味と「野百合花」」も参考になる。

（9）一九四二年に日本軍憲兵に殺害されたとき、陳其昌には四男一女がいた。王凡西と会った一九三〇年当時、少なくとも二人の息子がいたと思われる。前掲東洋文庫『初期中国共産党群像』第二巻巻末の解説拙稿及び、拙稿中の陳其昌一家の写真（三〇四頁）参照。

（10）香港周記行出版社版、二七三頁。香港士林図書服務社版、三一二頁。北京東方出版社版、二五四頁。柘植書房、日本語版、二三二頁。「兄貴（大哥）」は誰に対しても面倒見の良かった陳其昌のニックネーム。

（11）「訳者解題」でも記したとおり、訳者が二〇〇〇年に北京大学档案館で調べた『国立北京大学歴届同学録　１８９８—１９４７』（五十周年籌備委員会編、民国三十七年十二月、北京大学出版部）では「姓名：陳其昌、籍貫：河南洛陽、在校或畢業年：民［国］11—13、系：預乙、在校或畢業年：民［国］13—17　系：哲学」とあり、教育系や経済系に属した形跡は見あたらなかった。また、陳其昌が入学した一九二二年（民国十一年）から一九二七年（民国十六）までの「国立北京大学学生履歴一覧表」で在籍を確認したが、その範囲では上記『同学録』の記載と異同はなかった。

（12）「給陳其昌等的信」として、『陳独秀著作選』第三巻（上海人民出版社、一九九三年）に、「陳独秀致陳其昌」として

『陳独秀書信集』（新華出版社、一九八七年、内部発行）に収録。いずれも何之瑜編『陳独秀的最後論文和書信』（一九四八年）から再録されたもの。本書は胡適序を付して一九四九年香港で類似本が出ている。何之瑜は何資深（一八九八～一九六〇）のこと。北京大学時代に中共入党、湖南省委書記毛沢東の下で組織部長、後、トロツキストとなる。北京大学同窓会から派遣され、最晩年の陳独秀に仕え、遺稿収集、出版に尽力。一時トロツキー派組織から離れるが、一九四九年、鄭超麟、王凡西らとトロツキー派組織、国際主義労働者党結成に参加、一九五二年、中共に逮捕され、一九六〇年に旧友毛沢東の獄で獄死。『陳独秀評論選編』下（河南人民出版社、一九八二年）には何之瑜著「独秀先生病逝始末記」が収録さている。また、鄭超麟に「記何資深」という文章がある（鄭超麟著『懐旧集』、東方出版社、一九九五年内部発行、などに収録）。前掲『初期中国共産党群像』2の巻末人物注も参照のこと。なお、本書何之瑜編『陳独秀的最後論文和書信』に関しては、陳其昌の長男、陳道同が書いた未公刊資料「何之瑜晩年両件事」がある。これも興味深い資料なので、いずれ翻訳紹介したい。

（13）当時、上海北新書局が出していた月刊誌。『魯迅全集』注によれば、一九三一年三月創刊。趙景深、李小峰らが編輯にあたる。一九三七年七月停刊。『中国報刊辞典』（書海出版社、一九九二年）は一九三〇年十二月創刊、一九三七年七月停刊とする。

（14）一八八九～一九二七。陳独秀とともに、中国共産党を建党。一九二七年張作霖軍に在北京のソ連大使館で逮捕、その後処刑された。なお、張友松（一九〇三年～一九九五）は、湖南醴陵の人、北京大学英文科出身で魯迅の学生。北新書局編集者を経て、魯迅の援助の下、春潮書局を興す。詳しくは『魯迅全集』を参照のこと。『中国共産党名人録』（四川人民出版社、一九九七年）によれば、張挹蘭（一八九三～一九二七）は湖南醴陵の人。五四運動後、北京大学預科入学。一九二二年以後、反帝反封建闘争に参加、一九二五年国民党左派組織、中山主義実践社に加入し、同会理事、国民党北京特別市党部執行委員、婦女部長、同党部創刊の「婦女之花」主編を歴任。王凡西の言う如く、李大釗とともに捕らえられ処刑された。張友松との関係については今回は確認できなかったが、籍貫などから、王凡西の推測どおり、友松の姉ではではないか。王效挺・黄文一主編『戦闘在北大的共産党人（1920.10—1949.2　北大地下党概

況）』（北京大学出版社、一九九一年）には、張挹蘭の顔写真が載っており、烈士名簿（第十頁）にも記載がある。また北京大学党史校史研究室編『北大英烈（第一輯）』（北京大学出版社、一九九二年）に丁青による張挹蘭の略伝があり、それによれば、挹蘭には弟があったこと、一九二二年、北京大学預科入学、一九二四年教育系進学、李大釗の学生となり、また魯迅の授業に出ていたことなどが確認できる。魯迅は李大釗の遺稿集のために書いた「『守常全集』題記」（『南腔北調集』所収、一九三三年執筆）で、李大釗とともに処刑された人々の中には知り合いはいないと書いているので、言葉通りに受け取れば、魯迅は一九二〇年以来教鞭を執った北京大学で、張挹蘭とは知り合わなかったことになるが。なお、『戦闘在北大的共産党人』には陳其昌についての短い紹介があるが（第四六頁）、一九三七年八月十三日のいわゆる第二次上海事変後、ほどなく、日本軍に殺害されたとあり、これも殺害時期が不正確である。

（15）上海の日刊紙、一九二九年の創刊で一九四五年停刊。九・一八の所謂満州事変以後、抗日の姿勢を鮮明にした。

（16）香港士林図書服務社版三一二頁、邦訳版二三二頁。他版については以下省略に従う。

（17）？～一九四五。トロツキー派メンバー。一九四一年の日本軍による香港占領後、当地で地下活動に従事。一九四五年病死。

（18）注16に同じ。

（19）本文後出の汪孟鄒が経営する出版社。汪は陳独秀の旧友。亜東図書館については汪孟鄒の甥に当たる汪原放著『回憶亜東図書館』、学林出版社、一九八三年に詳しい。本書新版は『亜東図書館与陳独秀』、学林出版社、二〇〇六年。

（20）『回憶亜東図書館』所載の「附録：亜東図書館出版物目録」によれば、それぞれ原題、出版年などは以下の通り。一、『真理在前進（托案報告与講演詞）』、杜威著。カッコ内は「トロツキー事件と講演」の意。著者はデューイ。一九三七年刊。二、『人口西遷与中国之前途』、一九四〇年刊。三、『海南島与太平洋』一九四〇年刊。

（21）二人の中国人とは劉沢栄（一八九二～一九七〇）と張発奎（一八九三～一九七七）。詳しくは、石川禎浩著『中国共産党成立史』（岩波書店、二〇〇一年）九二頁参照。

（22）一九〇八～一九四三。香港の労働者。一九三〇年にトロツキー派組織に加入。一九三〇年代半ばの香港トロツキス

ト運動を指導した。一九四三年、広東省中山県で抗日ゲリラ戦を展開中、日本軍に殺害された。王凡西著『双山回憶録』の Gregor Benton による英訳版、*Memoirs of a Chinese Revolutionary* の人物注による。

(23) このトロツキーの書信とは一九三八年六月二五日付フランク・グラス［一九〇一～一九八七、当時上海で中国トロツキストとともに活動していたアメリカ人トロツキスト］宛のもの。双山［王凡西］訳『（一九二九―一九三九）托洛次基档案中致中国同志的信（トロツキー文書中の中国同志宛書信）』中の「致李福仁」（六）及びその訳注②参照。参考のため、当該注を以下に訳出する。なお、この書信集はハーバード大学ホートン図書館が所蔵するトロツキー文書（文庫）中の中国同志に宛てたトロツキーの書信を王凡西が翻訳出版したものである。書誌は未詳だが訳注などの記載から、一九八一年頃の翻訳、付注、その後ほどなく、香港トロツキスト組織が出版したものと思われる。このトロツキー文書についてはアイザック・ドイッチャー著の所謂トロツキー三部作の第三巻山西英一訳『追放された予言者』（新潮社、一九六四年初版、新評論社、一九九二年新版）の「序」を参照のこと。

王凡西の訳注②

トロツキーのこの書信と提案は、当時、香港にいた陳其昌によって、［陳独秀がいる］四川江津までわざわざ届けられた。陳独秀は声明を書いてこれに対する回答とし、陳其昌が上海に持ち帰り、トロツキー宛に郵送された。トロツキーのこの声明に対する見解は、一九三九年三月十一日付、李福仁［フランク・グラス］宛書信中に書かれている。トロツキーが陳独秀のアメリカ行きを希望しているという提案については、独秀はこれを実行しなかったが、それは一つには独秀の健康状態がすでに非常に悪かったからであり、二つには、国民党が公式に出国を認めたうえでアメリカに行くということが成功するチャンスは絶対にないと言えると考えたからである。当時上海にいた一部のトロツキー派は亜東図書館の主人汪孟鄒に、駐米中国大使胡適に手紙を書いてもらったことがある。胡適の旧友、陳独秀のためにアメリカの某大学で客員教授の職位を見つけ、アメリカに講義に赴けるようにしてほしいと頼んだのである。しかし、その後、胡適からは返信すらなかった。